

秋田大附属小 校内研修の特徴的な取組について

研究委員長 鈴木 聡

I 12/2 開催公開研究協議会 II 参会者のアンケートより【校内研修に関する記述】

1年 図画工作



若手教員がやりがいを感じながら取り組めるシステムが参考になりました。

若手の教職員が、主体的に授業をデザインし、挑戦する姿、それを支える校内研修の進め方が参考になった。



3年 体育

若手教員育成のためには、中堅もベテランも若手育成のために何ができるのかを考えていくことになり、それが自分の資質向上にもつながると考える。

6年 国語



それぞれの年代の役割が明確に示されていた。

ベテランの「挑戦」というのもよいと思った。

4年 外国語活動



「全員でアップデート」という言葉が本校においても生かせそうだ。

パネルディスカッション登壇者の若手教諭が自分の言葉で語る姿に感銘を受けた。

2年 生活

6年 総合

5年 総合



最も役立ったのは、若手教員育成。パネルディスカッションの編成でも感じられました。

パネルディスカッション「自律した学習者を育てる授業デザイン」

Ⅱ 秋田大附属小校内研修の特徴的な取組

- 1 若手教員研修プロジェクトの取組ー若手教員が協働して授業づくりに取り組むことを通して、相互の実践的指導力の向上を図るー
- 2 学習者目線と教科の専門的な視点からの見取り
- 3 当事者意識をもち自分事として校内研修に臨む
- 4 質的アプローチを用いた授業実践記録の執筆

Ⅲ 校内研修の特徴的な取組の具体

1 若手教員研修プロジェクトチームの取組

①ねらい

附属小学校の若手教育が、協働して授業づくりに取り組むことを通して、相互の実践的指導力の向上を図るとともに、その過程と成果の公開・発信を通して県内外の公立学校における校内研修の活性化に資する。

②メンバー

- ・採用10年目までの20代、30代前半の教諭8名で構成
リーダー丹理人教諭（本校2年目）※校務分掌に位置付け
- ・教職大学院ストレートマスター（インターンシップ中）、教育実習生（実習期間中）

③研修の過程

(1) 授業構想の話合い、教材研究、ワークショップ

- ・協働的に教材研究をすることを通して、参加者の教材に対する理解を深める。
- ・単元構成や本時案を構想する上で、悩んでいることや困っていることに対して率直に意見を出し合い、授業の方向性を定めていく。
- ・専門教科が異なる参加者や大学院生、学部生との協議や質疑応答を通して、授業者の思いや手立ての意図を説明する力の向上を図る。

メンバーで教材研究【7月】



【公開研Ⅱに向けて 3年体育】

主免実習生にワークショップ【9月】



【公開研Ⅰに向けて 1年国語】

外国語部中堅教員との合同ミニ研修会



【公開研Ⅰに向けて 3年外国語活動】

副免実習生にワークショップ【10月】



【公開研Ⅱに向けて 3年体育】

(2) 事前授業

- ・他学級で事前授業を行った。それぞれの学級の児童の実態に応じながら、若手研や公開研事前打ち合わせ会で提案された方法を試した。



【公開研Ⅰに向けて 1年国語】



【公開研Ⅱに向けて 1年図画工作】

(3) 提案授業

- ・事前打ち合わせ会や事前授業のリフレクションにおいて提案された意見から、最終的に授業者が選択・決定した構想のもとで、提案授業を展開した。



【公開研Ⅰ 1年国語】



【公開研Ⅱ 3年体育】

2 学習者目線と教科の専門的な視点からの見取りとそれに基づいた研究

協議

子どもの目線で学びの文脈を捉え、その価値を教科等の専門的な視点から具体的に認めることを重視している。そこで、学びの文脈を捉えるために、子どもが「何をしたのか (do)」「何を考えたのか (think)」「どう感じたのか (feel)」「何をしたいのか (want)」の4つの視点で見取ることを校内研修で積み重ねている。

【授業参観メモ】

心に留まった印象的な場面 (時 分) 見取った児童やグループ ()

Do 何をした？	
Think 何を考えていた？	
Feel どう感じていた？	例) 快／不快・興奮・安心・焦り・不安・わくわく・ドキドキ・イライラ
Want 何をしたい？	
考えられる背景	

学習者の目線から子どもの考えや感情を主観的に見取り、それに触れて協議を行った。子どもの学びの姿の具体から考えたその背景に触れながら、互いの授業観や指導観を交流することを通して、授業のよさや授業改善の方向性を探った。6月のオープン研修会においては、参会者にも体験していただいた。

算数 2 グループ R6オープン研 R6.6.7

本時の子どもの姿の具体と参観者の解釈 → それを支えた手立てや授業改善のために必要な手立て

意見交換したい → 普段から協働的に学ぶ意見

三角はうぎと、分度器で角度を求めようとしていた子ども
 うまくいかなかったが、友達の見聞を聞きながら補助線を使うと気付く
 間接的に学ぶ姿

友達の発表に対して「もっと簡単に説明できる」→まとめて生かされる。
 見当
 「200°」…180°より大きい ⇒ 既習を生かすという姿
 270°より小さい

「あ〜」 ⇒ 思考しているときに出る声
 「なるほど」

「90°しかない分度器 → 直角に着目している

「半回転」「余りとは？」 → イメージをもたせた。

各グループで見取った子どもの姿や授業のよさ、授業改善の方向性を協議し、**可視化**

【オープン研アンケートより】

- ・ 児童目線で授業を参観するという手法が斬新でした。参観された先生方のご発言から気付かされることも多くありました。
- ・ 子どもの具体的な姿が共有された協議会だった。教師にとって不都合な行動をとっている子どもも含め、子ども一人一人の学びを大切にす附属小学校の思いが反映された協議会だったと感じた。
- ・ 提案性の高い授業だったからこそ、参観された先生方からの感想や気付きがとめどなく話され続けたのだと思う。協議会自体、エキサイティングで楽しかった。

3 当事者意識をもち自分事として校内研修に臨むための取組

◇事前検討会にワークショップを導入

6月に行ったオープン研修会の事前検討会では、算数科・家庭科の授業者がワークショップを行った。ねらいの一つは、参加者が授業の核となる活動を学習者役となって実際に体験してみること。もう一つは、授業者が学習者役の参加者から思考や表現、抱いた感情について具体的なフィードバックを得ることで、必要に応じて構想の修正を図ることであった。



【4年算数 ワークショップ】



【5年家庭 ワークショップ】



【4年算数 提案授業】
「角の大きさ」



【5年家庭 提案授業】
「クッキング はじめの一步
～ゆでマスターへの道～」

【4年算数 授業者へのフィードバックより】

- ・子どもが自ら見付けた課題だからこそ、解きたくなる、説明したくなる教材になるのだと感じました。自分の見付けた角を見て欲しい、この角について説明したいという子どもの気持ちが感じられました。その反面、教師一人で子どもたちの各々の考えを見取るにはかなり難しいということも見られました。解き方で迷ったり、止まってしまったりする子どもへの個別指導やペア学習の効果について考えていく必要があるのだと思いました。

【4年算数 授業者のオープン研修会後の所感より（伊藤智美教諭）】

- ・事前の全体研ワークショップを受けて、子どもがどんなことに気付き、活動をする際にどんなことに困るのか見えてきたことが多かった。
- ・子どもが見付けてきたものから問題を作り、個々に作った問題を基に課題解決を行っていくという授業の流れに不安を感じながら授業作りを行った。実際にやってみることで、新しく困った子どもの姿を見付けたり、一単位時間で構想していた学習内容を次時にも取り入れると、より理解が深まることに気付いたりすることができた。次時以降は、単元の構想を変更して授業した。



【5年家庭 授業者へのフィードバックより】

- ・授業のねらいを達成することはもちろんだが、その先にある教師の願いが、授業中に教師自身が省察し、判断を下す上で重要であると考えた。「自分なりに工夫し、料理をする楽しさに気付き、将来につなげてほしい」という強い教師の願いが、様々な調理方法を認めることにつながった。このことにより、子どもたちが生き生きと活動する姿が見られた。自分で見付けた「やってみたい調理方法」が同じ子ども同士でグループを作り、宿泊学習の際にカレー作りを行ってみても面白いのではと考える。

【5年家庭 授業者のオープン研修会後の所感より（稲垣勇介教諭）】

- ・自分自身が得意ではない調理分野での家庭科実践であったが、理科の条件制御を生かした調理実験としたことで、自分も児童も授業に臨みやすくなっていたのではないかと思う。今までの自分のカリキュラムマネジメントには無理矢理感があったが、今回は教師と児童お互いに負担が少なく、その有用性を実感できた。
- ・理解には「実感をともなう」ことの重要性を感じた。調理実習は、正しい調理法を知識として理解した上で行うイメージだったが、調理実験とすることで、「味が薄くておいしくない」「時間がとてもかかる」などのエラーを経験でき、実感をともなった調理法の理解につながったと思う。エラーだけでなく、よりよい調理法のよさの実感を確実なものにできるように、よさを際立たせるような教師の支援も必要であると感じた。
- ・予備実験を行ったり客観的なデータを集めたりして、教師自身が「ゆで方」を追究したことで、学習指導要領や教科書に載っている調理法を推す根拠を明確にもった状態で授業に臨むことができた。教科の専門的な知識を秋田大学の研究協力者からも教えていただいたので、附属学校の強みを改めて感じることもできた。



4 質的アプローチを用いた授業実践記録の執筆

(1) ねらい

授業実践記録の執筆を通して、授業実践における子どもの行動を形づくった様々な状況や関係を意味付けることで省察を深め、授業観や学習者観のアップデート及び授業力向上につなげる。

県内公立小学校の教育実践に寄与する質的アプローチを用いた授業実践記録の記述の具体を提案し、冊子や電子ファイルで発信する。

(2) 執筆方針

- ①授業者が捉えた子どもの学びの姿と、その背景となる子どもの感情や具体の言動の理由に触れて主観的に記述する。
- ②教師が講じた手立てやその意図、教師自身の感情に触れて記述する。

令和6年3月に発行した令和5年度研究リーフレットより、4つの授業実践記録を紹介する。

実践者自身による子どもの学びの意味付け

2年生活「自然を感じ、自然に浸りながら」より一部抜粋

【保坂智子教諭】

A児は学級の中で遊びをリードするタイプの子どもであった。自分で考えた遊びが学級全体に広がったことで、その嬉しさが身体全体からあふれてきていた。

A児は風で袋を飛ばした後は、ひもをつけて凧のようにしたり、袋に水を入れ山から流して川のようにしたりと遊び方をどんどん変化させていった。他の子どもたちも砂に絵を描き始めたり、草花を摘んだり、どっぴりと自然に浸りながら遊ぶ姿が見られた。

子どもたちにとって『自然を使う』とは、以前は草花、樹木、木の実などを使って遊ぶ事であったが、植物以外の風や水の働きを利用して遊ぶ事も『自然を使う』なのだ実感していた。「目が向いていなかっただけで、楽しめる自然が身の回りにいっぱいあるんだ！」と、子どもたちの自然観が広がり、更新した瞬間であった。



5年音楽「リアルタイムで体感する響き合い」より一部抜粋

【大山光子教諭】

A児は、自分で声が出しづらくなっていることに気が付いており、パートを決めるときも低い音域の下パートを選んでいった。

～ 中 略 ～

教師がモデルを示すよりも、子どもたちに近い存在をモデルとすることで、低い声の安心感やオクターブの違いがもたらす響き合いなど、課題の解決につながることを期待し、中学生をゲストティーチャーとして招いた。すると、期待以上に、男子中学生の生の歌声が二人を笑顔にしたのである。となりで歌う中学生の声に包まれ、背中を押されるかのように思いっきり歌っていた。「何だ、これでいいんだ。」と安心して声を出している堂々とした様子。

～ 中 略 ～

自分の声だけを気にしていたA児が、周りとの調和（響き）にも意識が向いてきた瞬間でもある。少し背伸びをしたら手が届きそうな、目の前で見せてくれるモデルの存在は、歌い方の詳しい説明よりも効果がある。モデルに近付けたという達成感が、今後の自信につながるのだ。

子どもの学びを解釈する自身の枠組みの自覚

5年算数「『単位量あたりの大きさ』の授業実践を通して学んだこと」より一部抜粋

【井谷紀子教諭】

この時間に全体で取り上げ共有すべきは、つまずきや分からなさであった。私は問題を解決できた子どもの考えを取り上げ、解き方を共有し一般化を図ろうとしたが、むしろ「分からない」という声を拾い上げ、全体でつまずきを共有することが、多くの子どもの理解につながったと考える。

どこでつまずいたのか、何が分からないのかを、子ども同士で考えを補ったり修正したりしながら解決へと導くことで、理解が深まる。

～ 中 略 ～

算数科の授業づくりでも、全体で取り上げ共有すべきことは何かを吟味する必要性があることを学んだ。

外国語において重要なのは、コミュニケーションにおける【目的・場面・状況】である。A児の言葉は【状況】を見据えてのものであり、私に欠けていたものだと気付かされた。相手が喜ぶメニューを提案するという【目的】ばかりに目が行って、視野が狭くなっていた自分を反省しつつ「あなたがすすめたい時の食事でもいいよ」などと曖昧な返答しかできなかったことが悔やまれる。

～ 中 略 ～

相手とのコミュニケーションを面白がりながらメニューを考える姿は、相手が喜ぶメニューと言いつつも、無意識に自分好みのメニューとしていた子どもたちに、相手意識が芽生え始めたのだと考えられる。私は、子どもたちが私の作った食べ物シールから離れ、相手に寄り添い考える様子を、相手意識の芽生えと捉え、微笑ましく受け入れることができた。

◇令和6年度研究実践記録は、令和7年3月中旬本校ホームページ掲載予定